

アイルランドを翻訳する——シャーロット・ブルックをめぐって¹⁾

佐 藤 亨

1.

ベルファストのクイーンズ大学で歴史学を講じたJ.C. ベケットは教授就任講演で、土地を基軸とした歴史観を提唱している。²⁾ この講演が行なわれたのは一九六三年のこと。アイルランド史は公式に教えられてまだ三〇年という日が浅い学問だった。

ベケットは言う。アイルランドの歴史は、特に十二世紀以降、統一性や持続性を欠いている。十七世紀になってはじめて政治的に統合されるものの、その中心にある権威がイングランドの君主であるために、アイルランド史は細別されたイングランド史になりがちである、と。アイルランド王国とは名ばかりで、イングランドの政策に沿って運営されているに過ぎないというわけである。そこから、彼はアイルランドを時計にたとえる。しかも、文字盤こそアイルランド製だが、その仕掛けはイングランド製であるというのだ。

たしかに、アイルランドはデーン人、イングランド人、あるいはスコットランド人など、さまざまな外来者が入ってきてはその土地に住みつき、そのつど、土地の所有者や支配者が交代してきた。先住者は土地を奪われてきたが、先住者と呼ばれる人びとでさえ、もとをたどれば外来者である。はじめに土地ありきなのである。

ベケットは土地に住む人びとを「可変の要素」と呼び、一方、支配・被支配が繰り返される中で持続してきた土地を「不変の要素」と呼ぶ。歴史とは支配者の交代を記述するのではなく、土地という揺るぎない要素と「人々が築いてきた関係」を通して語らなければならないと彼は主張する。³⁾

アイルランドにおいてイングランドやスコットランドからの入植は十六世紀後半から始まり、そ

れとともに、ゲールの族長の影響力は徐々に失われていった。ゲール文化は減んでいき、そのかわりにイングランドやスコットランドからの文化が浸透していく。特に、一六九〇年のボイン川の戦いでのプロテスタント側の勝利は古いゲール文化の衰退に拍車をかけることになる。とはいえ、外来の文化は土着文化を一掃したわけではない。それどころか、根づく先である土地の影響を受けたのである。

入植者の中には土着の人びとと進んで交流を持つ者もいれば、孤立していた者もいた。しかし、どちらの場合もアイルランドという同じ土地で生活していたことには変わりはない。ベケットに言わせると、両者とも「同じ地勢的影響」を受けたのである。それゆえに、イングランドやスコットランドからの外来文化は、内地アイルランドの文化と接触し、時に融合し、時に交雑する。その結果、片やアングロ・アイリッシュ、片やスコッチ・アイリッシュと呼ばれるものに変質していった。アイルランド風になっていったのである。

ある文学史家は、「十八世紀のアイルランドに住むイングランド人は、過渡期にあって、ゲールの伝統の断片を集めては、それをイングランドの伝統に変形させながら、自らの新しいアイデンティティを創造することを次第に学んでいった」と述べている。⁴⁾ イングランド人がアイルランドで創出した「新しいアイデンティティ」こそ、イングリッシュでもアイリッシュでもない、その中間に位置するアングロ・アイリッシュというものであろう。彼らはアイルランドに馴染むために、彼らなりに土着の古いゲールの文化を吸収しながら、土地に根づいていったのである。ここには文化の翻訳がある。

2.

アイルランドはケルトという概念に拠ってアイデンティティを確認しようとした。また、ケルト系諸語の一つであるアイルランド語を国語として復興させようとした。それがアイルランドの文化的ナショナリズムであり、また、文芸復興であった。

特筆すべきことは、アイルランドが自国文化に目覚めていく際、アングロ・アイリッシュと呼ばれるアイルランドのプロテスタントがその運動を推進したことである。特に、十八世紀後半からのケルト・ブームはダブリンの知識人の間で起こった。彼らの多くは上流階級に属し、アセンダンシー (ascendancy) と呼ばれる。

シャーロット・ブルックもその一人であった。彼女はアイルランドに伝わる英雄詩、オード、エレジー、歌などを翻訳し、『アイルランド詩拾遺』*Reliques of Irish Poetry* (以下『拾遺』とする) と題して一七八九年に出版した。⁵⁾

翻訳に収められているのは、アルスター物語群やフィニアン物語群、そして古代アイルランドの王の系譜にまつわる物語、さらに、十七世紀から十八世紀に活躍した盲目の吟遊詩人カロランの歌などである。ちなみに、アルスター物語群とはキリスト生誕前夜の時代、アルスター地方に繰り広げられる物語で、最大の英雄がクー・フリンである。また、フィニアン物語群とはアルスター物語群の三百年後、アイルランドの王フィン・マク・クイルと、フィンに仕えるフィニアンと呼ばれる騎士団が登場する物語である。

これらアイルランドに伝わる物語や詩は今でこそ、さまざまな英訳によって読むことができる。しかし、神話と歴史、伝説と史実との間にある境界線も定かでなかった時代、これをアイルランドの文化伝統として発掘し、その上、英訳し、なおかつ、英国の読者に紹介することはきわめて野心的な営みだった。それだけに、彼女の翻訳は、その後の英国・アイルランド両国の歴史の中で政治的な意味を帯びていく。

『拾遺』出版十二年後の一八〇一年にアイルラ

ンドは連合王国に併合される。その後アイルランドでは自治ないし独立を目指すナショナリズムが台頭し、文学もまた、政治とは一線を画しながらも、文化的ナショナリズムとも言うべき運動を展開する。その運動の中でブルックの翻訳は先駆的な意味を持ったのである。

ブルックのような、いわば土着のアイルランド人ではなく、プロテスタントのアングロ・アイリッシュが、アイルランド固有のゲールの文化を擁護しようとしたことは興味深い。彼らアングロ・アイリッシュは、アイルランド文化の英国化、アイルランド語の英語化を促進したという面から見れば、いわば、ゲール文化を破壊した立場にあるのだが、その一方で、彼らはアイルランドに伝わる文化を自覚的に擁護し、それをヨーロッパ全体にも誇れる文化として紹介しようとしたのである。

アイルランドの文化的独自性を主張する際、彼らが拠って立ったもののこそ、「ケルティック」(Celtic) という概念であり、それは、「ブリティッシュ」(British) や「ローマン」(Roman), そして「アングロ・サクソン」(Anglo-Saxon) などとは違い、アイルランド性をあかすものだったのである。

3.

シャーロット・ブルックは、一説によると、一七四〇年に、アイルランド北部のカヴァン州ランタヴァンに生まれ、ダブリン近郊のキルデアで育った。ブルック家とアイルランドの関わりは植民の時代にさかのぼる。十六世紀に起こったゲールの族長たちの反乱が鎮圧されると、アイルランドの土地は没収されていく。その土地はイングランドやスコットランドからの入植者たちに配分され、歴史上、土地の配分を受けた人をアンダーテイカー (undertaker は「植民事業請負人」と訳される) と呼ぶ。イングランド出身のブルック家は北部アルスター地方に土地を配分されたアンダーテイカーだった。

祖父はアイルランド国教会の教区司祭。そして、父のヘンリーは文学者で、劇や小説を書き、ロンドンでも活躍した。ジョナサン・スウィフトに激

賞され、詩人のアレクサンダー・ポープなどと知己を得るなど、作家として将来を嘱望されていた彼だったが、病氣療養のためにアイルランドに戻った後は、ロンドンに出向くことはなかった。

ヘンリーは妻キャサリンとの間に子供を二十二人設け、シャーロットがその末っ子で、母の死後は彼女が一人、病気の父親の世話をした。父が亡くなったのは一七八三年、そして、彼女が亡くなったのは一七九三年であるから、彼女が文学活動に従事したのは晩年の約一〇年間ということになる。また、父親の死後も、著作集の序文を書いたりしており、まさに彼女は、自ら書簡で語っているように、「父親のために生きた」と言えるだろう。⁶⁾

シャーロットは教育を家庭で、父親から受けた（ちなみに、アイルランドで女性が大学に進学するのは一八八〇年代からである）。子供の頃から、周囲が心配するほど読書にふけていた彼女は、シェイクスピアやミルトンを読み、やがて、アイルランドの古典への関心を抱いていく。その後、翻訳をするようになり、その一つを、ジョセフ・クーパー・ウォーカーの『アイルランド吟遊詩人の歴史的回想』(*Historical Memoirs of the Irish Bards*)に寄せる。

ブルック家はウォーカーと付き合いがあり、その縁で翻訳を発表したのだが、彼女はウォーカーをはじめとして、多くのケルト学者や好古家と親交を持った。代表的な人に、シルヴェスター・オハラハンやトマス・パーシーなどがいる。

『アイルランド総史』(*General History of Ireland*)を書いたオハラハンがブルックの名付け親である。一方、ウォルター・スコット、ワーズワス、コールリッジなど、ロマン主義の作家・詩人たちが愛読した『古英詩拾遺』(*Reliques of Ancient English Poetry*)を一七六五年に出版したパーシーは、後にダウソンのドロモアの司祭としてアイルランドに移住する。ダブリンでは絹の傘で有名だったらしい。ブルックの翻訳、*Reliques of Irish Poetry* がパーシーの *Reliques of Ancient English Poetry* というタイトルを思い起こさせるように、パーシーはブルックに翻訳を激励したのである。

この時代、アイルランドではケルト・ブームというべき現象が見られ、そのブームはマクファーソンの『オシアン』に刺激される形で起こったという側面がある。マクファーソンは自分の著書を「紀元三世紀にさかのぼる写本」を忠実に翻訳したものと言い、また、スコットランドの文学伝統はアイルランドよりも古く、フィニアン物語群の起源はスコットランドにあると主張する。これに対し、アイルランドで反論が起こる。オシアンの歌はアイルランド伝来のものであるから、マクファーソンのものは剽窃だというものである。これは、いわば、ケルトの本山争いで、その争いを通してアイルランドのケルト・ブームが加熱していた。

当時の加熱ぶりはダブリンでさまざまな団体が結成されたことからわかる。一七七二年に王立ダブリン協会が創設され、その後、ヒベルニア好古協会ができ（一七七九―一八三年）、それが発展解消されて、王立アイルランド・アカデミーが設立される（一七八五年）。自国文化のアイデンティティを確立する気運がみなぎっていく中、オハラハンの『アイルランド総史』、ウォーカーやブルックの作品がマクファーソンの説を反証する形で出版されていく。アイルランドこそケルトの本家本元というわけである。

それを特徴的に物語っている例の一つに、ブルックが自らの翻訳書に原文を添えたことが挙げられる。「複写した原文」（‘original of ditto’）が併録された『拾遺』は、バイリンガルになっている。彼女は原文という実例を載せることで、自分が翻訳した物語や歌が正真正銘のものであることを示したのだ。

原文を掲載することは、文化的ナショナリズムの面でも大きな意味があった。彼女の本はアイルランド語の活字で印刷された、ダブリン最初の文学書だったようである。その活字は彼女にちなんで「ブルック活字」とも呼ばれている。詩人で文芸評論家のシェイマス・ディーンによると、この活字が出た後、十九世紀の最初の二十五年間にさらに五種類のアイルランド語の活字が発明されたという。

アイルランド語は、連合法以後、英語という植民地語の圧力に屈していく中で、依然としてアイルランドの国民性をあかす砦だったのである。ディーンは‘character’という「活字」と「特性」の意味を併せ持つ語に引っ掛けて、この時代、アイルランドの国民性(‘national character’)はアイルランド語の活字(‘national character’)を必要としていたと付言している。⁷⁾当時のアイルランドは、ナショナリティ(国家・国民)を証明する表象や内実を求めたのだ。

4.

『拾遺』の内容は今となつては別段新しいものではない。重要なことは彼女が翻訳を通してなにを意図したか、そして、彼女の翻訳がアイルランドの歴史と文学史の中でどのような意味を持ったかであろう。

『拾遺』には序文を付いているので、それを見ることにしよう。

ブルックはまず、前述したオコナーやオハラハン、そして、王立アイルランド・アカデミーの創設者の一人であったチャールズ・ヴァレンシーなど、先輩のケルト学者の業績を称え、自分の翻訳は先達が辿った道に撒かれる花にすぎないと謙遜する。

アイルランドでは十八世紀に女性の本の出版が始まり、特にその世紀の後半はゲール文化に対する興味や関心が高まり、出版の機会は増えていった。ブルックの翻訳も、そうした時代の流れの中で出版されたとも言えるが、女性の詩人や翻訳家は依然として少なく、序文で吐露されている出版に対する戸惑いや謙虚さは、学会や文壇に占める女性の割合の低さに起因すると考える研究者もいる。⁸⁾

彼女は次にアイルランド語の豊かさを称え、その言語には「崇高な威厳」(‘sublime dignity’)があると語る。また、吟遊詩人たちの詩を、「洗練された才能の輝き」、「高揚したヒロイズムの精神」、「純粋な名誉欲の感情」、「利己心のない愛国主義」、「洗練された作法」などの特徴を備えていると賞賛する。そして同時に、他のヨーロッパ地

域を「野蛮」(‘barbarism’)と形容し、いにしえのアイルランドの高貴さを強調する。彼女にあって、「崇高な」(‘sublime’)という形容辞は、「野蛮な」(‘barbarian’)と対を成す概念である。

ブルックを含め、この時代にアイルランドの文化的ナショナリティを擁護した人々は、古代のケルト民族が野蛮な異教徒であるという通念に抵抗したのである。たとえば、騎士道はローマではなく、ケルト民族の中でいち早く確立されたと彼女は主張する。

また、フィニアンが忠実で勇敢であるばかりではなく、いかに他者への思いやりにあふれ、優雅さを備えていたかを強調する。こんな注がある——「この呼びかけの言葉に含まれる優美さと繊細さはいくら賞賛の言葉を費やしても、それで十分ということはない。これほどに親切で洗練された振る舞いは、野蛮な国ではまずありえないことである」。⁹⁾

次に翻訳の意義を二つの観点から述べる。一つはアイルランドという観点から、もう一つは隣国英国という観点から。まず彼女は自分の翻訳を自国への奉仕と考える。その理由として、遠い過去のケルトの伝説や神話を、「民衆が馴染んでいる言語」(‘a language with which they(i.e. the public) are familiar’), すなわち英語に翻訳紹介することは、古代の天才が残した価値ある遺産を忘却から救うことであると述べる。

一方、彼女はアイルランド語を「なおざりにされた言語」(‘this neglected language’)と呼んでいる。彼女の時代、アイルランド語による詩作は依然として続けられていたが、その伝統も、もうじき衰退する運命にあり、彼女が保存しなかったら残らなかったものもあると言われているほどだ。彼女は写本で見、あるいは、実際に農民から聴取して記録した。

そして、その後に英国の読者に向けたメッセージが続く。

今のところ、わが国は隣国の高貴なるブリテンにまるで知られていない。近づきになれば、両国はよりよき友となるだろう。英国のミューズ

はこの島に姉がいることを知らない。だから、互いに紹介しあいましょう。あずまやから出て一緒に歩きましょう。利益と友好のあらゆる絆によって生来一つに結ばれていると思われる両国を真心のこもった連合へと導く仲立ちをする美しき女性大使として。¹⁰⁾

5.

ブルックがアイルランドのミューズを英国のミューズの「姉」(‘an elder sister’)と呼んでいることからわかるように、彼女には自負があった。文化的伝統の面では、アイルランドの方が英国よりも優れていると彼女は信じていたのである。この時代のケルト復興はアイルランドが自国文化の正当性を主張し、それと同時に、対英国との関係の中でアイデンティティを確認した運動であった。ケルトとは英国との関係を意識した上で見出され、そして、創出されたアイルランドの象徴だったのである。

文化的アイデンティティを探究する動きは、音楽にも見られた。一七九二年にはベルファストでハープ奏者を集めたフェスティバルが開催される。この催しも、アイルランドに伝わる音楽と詩を復興させ、国民性を再認識することを目的に掲げた。これに参加したエドワード・バンティングは、演奏された曲を採譜し、それをまとめ、『古代アイルランド音楽集』(*General Collections of Ancient Irish Music*)と題して出版する。

シェイマス・ディーンは、ブルックとバンティングの二人が、アイルランドのケルト復興において先駆的役割を果たしたと指摘する。そして、バンティングが『アイリッシュ・メロディーズ』(*Irish Melodies*)の著者であるトマス・ムアに与えた影響について次のように述べている。

シャーロット・ブルックとバンティングはアイルランド版ケルト復興の先駆的作品を提供した。ブルックは原文と翻訳を添えて英語圏の読者をゲール語詩の世界へ導いたし、バンティングは消滅しかかった音楽伝統の回復に着手し、アイルランド史上きわめて緊迫した時代に、古

来より伝わる土着音楽の実例を提供した。そして、その音楽は、昔ながらの曲に英語という言葉による新しい歌詞を乗せる、さらなる翻訳によって同時代に適應されることになる。この時代の波に乗り、類まれなる能力を発揮した者こそ、トマス・ムアであった。¹¹⁾

ここでいう翻訳とは二種類あり、一つはブルックがアイルランド語を英語に訳したこと、もう一つはトマス・ムアがアイルランド土着のメロディーに新しい英語による歌詞をつけたことである。アイルランド語を知らなかったムアは土着のメロディーに感傷的ではあるが愛国的な詩を載せた。そして、ムアによって翻訳されたアイルランドの歌は、自国ばかりではなく英国の聴衆をもひきつけたのである。

ディーンが翻訳を「同時代への適應」と形容しているように、この時代、翻訳は重要な役割を果たした。一つは英訳によってアイルランドの伝説や歌を英国に紹介したという対外的な点、もう一つは、アイルランド語からの英訳がアングロ・アイリッシュ文学、すなわち英語によるアイルランド文学を形成していったという対内的な点である。

さて、翻訳という営みからは、アイルランドが植民地であったゆえに抱くジレンマをうかがうことができる。というのも、英訳されたアイルランド語の詩や歌を、当のアイルランドが、自国の文化的ナショナリズムを育成するために必要としていたからである。それほどまでに、アイルランド文化の英国化(英語化)は進行していた。「ケルト」は原文のままではなく、英訳されることによって保存され、忘却をまぬかれたのだ。

ブルックはアイルランドのミューズを英国の「姉」と呼んでいるが、実質的な上下関係は逆であった。また、彼女は自らの翻訳を「女性大使」と名づけているが、これは裏を返せば、アイルランドが妹の言語である英語によってしか英国との文化交流ができなくなっていることを示しているのである。

6.

ブルックが生きた時代、そして、その後続く十九世紀のアイルランドは、盛り上がりを見せたナショナリズムが、英国との連携を維持しようとするユニオニズムと激しく対立した時代だった。ここで簡単に時代を眺めてみたい。

ブルックの作品が発表された一七八九年はフランス革命の年である。フランス革命、そして、その七年前のアメリカ独立戦争は、王政を打破したという点でアイルランドの知識人に大きな影響を与え、同時に共和国の実現を目指す機運を生み出す。その指導的役割を果たしたのがウルフ・トーンである。彼は英国との絆を断ち切り、すべての人が選挙権を得る宗派を越えた共和国の実現を目指し、その理想のもと、一七九八年にユナイテッド・アイリッシュマンの反乱が起こる。

しかし、反乱は失敗し、その結果、アイルランドは連合王国の一部として併合される。一八〇〇年の連合法(Act of Union)によって、アイルランド議会は廃止され、すべてがウェストミンスター議会で掌握されることになるのである。

しかし、その後、ダニエル・オコンネルを中心にしてカトリックの解放運動が高まりをみせ、カトリックも下院議員になる道が開かれる。また、彼は連合の撤廃を推進し、古代の聖地タラで、五〇万人以上が参加したといわれる歴史的な大集会を開く。

オコンネルに共鳴したのが、青年アイルランド派を指揮したトマス・デイヴィスだった。彼は『ネイション』(*The Nation*)という自ら発行する雑誌で自国文化の独自性を説く。彼の愛国的な感情にあふれた詩「ふたたび、ネイションに」('A Nation Once Again')には次のような一節がある。

そしてわたしは依然として見たい

足かせが二つに裂けて

長らく植民地だったアイルランドが

ふたたびネイションになるのを¹²⁾

詩として出来映えがいいかどうかは別として、

そのメッセージは明確である。アイルランドが「植民地」('province')という「足かせ」('fetters')を解かれ、「ネイション」('nation'), すなわち「国家」として独立することを説いているデイヴィスの詩は、きわめて政治的である。

そして、十九世紀の半ば、ジャガイモ飢饉が起こる。百万人近くが飢えや病気で死に、一五〇万人近くの人びとが移民したといわれる大飢饉が、アイルランド語に与えた影響は甚大で、一八五一年の後、その話者は人口の五分之一に激減した。

飢饉がその後のナショナリズムに与えた重要な影響は、移民によってアイルランドをあとにした人びとが、移民先で、特にアメリカで祖国の独立を支援したことである。その一つのあらわれが、一八五八年、ニューヨークで結成されたフィニアン兄弟団(Fenian Brotherhood)である。

「フィニアン」(Fenian)という語はアイルランドの伝説上の騎士団であるフィアナ(fianna)に基づく。この団体の名称は象徴的である。というのは、ブルックの時代、アイルランドの伝説は、当時の好古家や学者が関心を寄せた、いわば、現実から距離を置いた文化的ナショナリズムに属するものであったが、十九世紀の半ばになると政治的ナショナリズムと結びつくようになったからである。すなわち、伝説の英雄は、輝かしい過去に属するのではなく、アイルランドから植民地という足かせを解く現代の英雄という意味合いを帯びてくるのだ。奇しくも「フィニアン」(Fenian)という語はブルックが最初に用いた語なのである。¹³⁾

ニューヨークでフィニアン兄弟団が結成された同じ年にダブリンではアイルランド共和国兄弟団(Irish Republican Brotherhood)が結成され、共和国実現というウルフ・トーンの願いが再燃する。一八六七年度のフィニアン反乱は失敗に終わったものの、時のグラッドストーン内閣にアイルランド問題を真剣に考えるきっかけを与え、アイルランド自治法案の提出につながっていく。

その担い手がアイザック・バットである。アイルランド議会党を結成し、アイルランド議会の設立を平和的、合法的に求める運動を展開した彼は、フィニアン弁護士であり、多くのフィニアンを

傘下に収めながら運動を展開した。バットの運動は、彼の後にアイルランド議会党を率いたチャールズ・スチュアート・パーネルに継承される。パーネルは、地代を払えず苦しんでいた農民たちの怒りを結集し、土地同盟を結成。そのエネルギーを自治法案要求へと合流させていく。

自治法案は一八八六年以来三度にわたって提出され、ついに一九一四年に議会を通過し、その結果、南の二十六州が一九二二年にアイルランド自由国となる。

以上が、ユナイテッド・アイリッシュマンの反乱から、自由国成立までの歴史の大きな流れである。ブルックは一七九三年に亡くなったわけだから、一七九八年の反乱は知らない。まして、ウルフ・トーンが唱えた共和主義がその後のナショナリズムを動かしていったことも知らない。彼女は翻訳という女性大使を通して、英国との友好関係を築こうとしたが、その後、アイルランドが連合王国に併合されたことを考えれば、彼女が望んだ「真心のこもった連合」は実現されなかったと言えるだろう。

また、彼女が翻訳・紹介した古代ケルト世界は、彼女の意図を越えて、その後の歴史の中で政治的な意味を帯びていったと言えるだろう。彼女がその先駆けとなったケルト復興は、単なる過去の再認識にとどまらず、時代がナショナリズムに傾倒する中で、植民地アイルランドの現状を打破するための象徴や物語を人々に提供したからである。人々が古代の騎士であるフィニアンに自らをなぞらえて、武器を取ったことなどはその顕著な例だろう。

しかし、文化のナショナリズムは政治のナショナリズムと一線を画していたことも事実である。彼女も擁護しようとした「ケルト」とは、アイルランドのプロテスタントとカトリックが歩み寄る共有地であった。ディーンは、「ケルト」というものが、現実とかけ離れた過去に属していたために、両宗派が現実の世界では対立関係にあったとしても、両者はケルトという文化という平面で一つになりえたと指摘している。¹⁴⁾ 文学者は宗派上の対立を越えた、同じアイルランドに住む者と

ての共通項、すなわち、文化を拠り所として、アイデンティティを模索していった。

実際、文化的ナショナリズムを推進するアングロ・アイリッシュたちの多くは、政治的には英国との連携（ユニオン）を維持しようとするユニオニストだった。その一人に、『西ゲールの歌』(*Lays of the Western Gael*)をはじめとして、多くのゲール語の詩や伝説を翻訳したサミュエル・ファーガソンがいる。ナショナリズムとユニオニズムの同居は一見矛盾するようだが、ファーガソンにとって英国とのユニオンはアイルランドが文化的アイデンティティを築く上での前提だったのである。エドマンド・バークがフランス革命を伝統や文化を破壊したとして非難したように、ファーガソンもまた、アイルランドがナショナリズムの道を突き進み、革命へ向かうことを恐れたのである。

ディーンはこの時代の文化的ナショナリズムを「ゲール語を仲立ちとしたアイルランドの過去のロマン主義的な再認識」と説明している。¹⁵⁾ ゲール語世界は、アイルランドが植民地となり、英語化が促進されるにつれ、ますます片隅に追いやられていったが、一方で、それは崇高な廃墟として映ったのだ。そして、その風景は翻訳を通して再認識されていく。

まさにアイルランドの十九世紀は翻訳の世紀であり、文学はゲール語作品の翻訳を通して、自国の伝統に目覚めていった。ブルックはその草分けになったとも言える。そして、彼女の業績はトマス・ムア、ジェイムズ・クラレンス・マンガン、さらにはファーガソンに受け継がれていく。そのファーガソンをイエイツは「最も中心的で、最もケルト的な」詩人と形容している。¹⁶⁾ 当然ながら、ブルックの翻訳はファーガソンなどを経て、イエイツなどの文芸復興期の詩人につながっていく。しかし、イエイツの時代になると文学を取り巻く状況は変わり、アイルランドがナショナリズムの高まりの中で自治を目指したように、文学もまた、英文学からの自治を求めていったと言えるだろう。

7.

ディーンは十九世紀における政治と文学の関係をジキルとハイドの関係にたとえている。¹⁷⁾ 彼はこの比喻を通して、アイルランドの政治と文学のうち、どちらがジキルで、また、どちらがハイドかと言っているわけではなく、政治がいつのまにか文学になり、それと同様、文学もいつのまにか政治になってしまう傾向について指摘する。それはまるで、ジキル博士が夜にハイド氏になり、朝はジキル博士として目覚めるのだが、そのうち、ハイド氏の生命力が強いあまり、朝起きてみてもハイド氏のままであるという風である。

ハイド氏 (Hyde) が、'hide'、すなわち、「隠す」とか「覆う」という動詞を想起させるように、ハイド氏はジキル博士の影に「隠れ」、「覆われて」いるものの、ジキル博士の内部に存在する。アイルランドの場合、政治の中に文学が隠れているがゆえに文学がいつしか政治になり、また、逆に文学の中に政治が隠れているがゆえに政治がいつしか文学になる、とディーンは指摘するのである。

ディーンが用いたジキルとハイドの比喻は政治と文学ばかりではなく、アイルランドと英国の関係にも用いることができよう。すなわち、植民地アイルランドは帝国の影に隠れたハイド氏のようなもので、やがて一人格を、すなわち、自治や独立を主張し始める。その際に、ハイド氏が抛って立ったものが、ケルトというアイデンティティであったと言えるだろう。すると、ブルックの翻訳は、イングランドというジキル博士に、いまだ十分に認識されていない、ケルトというアイルランドの存在を、すなわち、英国化や英語化の影に隠れたハイド氏の存在を、ジキル博士の言語である英語に翻訳することで知らしめるのに一役買ったということになる。

英国にとってケルトというアイルランドは、ハイド氏と同様に抑圧しがたいものであった。同時に、英語にとってアイルランド語もまた、ハイド氏のように制御しがたいものだった。アイルランド語は英語で翻訳(制御)しきれなかったのである。このことは、詩が他の言語に翻訳しきれないのと

似ている。

マイケル・クロニン『アイルランドを翻訳する』(*Translating Ireland*)の中で、十八世紀から十九世紀のアイルランドにおける英訳を、「隠喩が多く活力に溢れ、詩的流暢さ」('metaphorical energy and poetic eloquence')に満ちた言語であるアイルランド語を、「権力と商業の言語」('the language of power and commerce')である英語への変換だったと述べている。¹⁸⁾

連合法以後、英語が強制・奨励されていく中で、アイルランド語はますます非近代的、非実用的なものになっていく。言葉を変えれば、英語化が進む分だけ、アイルランド語はメタフォカルでポエティックに映っていった。この点はブルックも痛感していたようで、彼女の翻訳もアイルランド語の原典を一字一句字義通りに英語に移したのではない。

ある意味で、ブルックはアイルランド語という詩的言語で書かれた神話や伝説を、支配国の言語である英語に変換して紹介した翻訳者であったと言える。しかし、これは盾の半面に過ぎない。

たしかに、英訳は英語化であり、その意味において植民地化であった。しかし、英訳されたケルトは、逆に英国に脅威を与えた。ケルトは植民地化(英語化ないしは英訳)によっても、御すことができないアイルランド性だったのである。それを裏づけるかのように、アイルランドのナショナリズムはケルト復興とともに盛り上がり、やがて自治を獲得するまでに至ったのだ。

そして、英訳されたアイルランド語文学はアイルランド内部において大きな作用を及ぼした。過去の、しかも、自国の文学が翻訳を通して発掘されたことによって、皮肉ながら、アイルランドは内なる詩人に出会ったと言えるのではないだろうか。この時代の英訳は植民地アイルランドが行なった、宗主国の言語による自己主張だったとも言えよう。翻訳は文化・政治両面にわたるナショナリズムを育み、十九世紀の後半になると、アイルランド語を国語として復活させようとする動きまでも導くことになったのである。

8.

『拾遺』には一つだけ翻案が含まれている。最後に追加されている「アイルランドの一物語」(‘An Irish Tale’)という作品で、ブルックが歴史書に触発されて詩の形に直したものである。歴史書といっても史実の記述に終始するものではなく、物語性が強い歴史読本といった性格のものだったろう。

翻案は翻訳と違い、翻案者の創作にかかっている部分が多く含まれる。物語が始まる前の序文、特に、詩人がミューズに呼びかける一節には、ブルック自身の声が響いている。

温和な客人であるミューズはしばしば
女の姿をして住みつく
すると、愛国の火が女の胸中で燃え
申し分のない暖かさに包まれる

だから汝の仕事を受け入れよ
空想に心みだしたりせず
英国のミューズの目の前に
姉の魅力を見せてやりなさい¹⁹⁾

ブルックは翻訳者として二つの言語のはざ間に立ち、また、詩人としてアイルランドのミューズに仕え、また、愛国者としてアイルランドの文学伝統を一身に背負いながら、英国のミューズにアイルランドの文化的遺産を示したのである。これはまさに、アングロ・アイリッシュという中間的立場にいる者のなせる技である。

彼らアングロ・アイリッシュはアイルランドの支配層に属し、いわゆる、アイルランドの民衆とは距離を置いていた。実際、ブルックの翻訳を購読した人の多くはダブリンの上流階級に属す人びとであった。しかし、彼らは、土着言語によるアイルランドの文化的遺産を、翻訳によって救い出し、その伝統を後代に引き継いでいった。

アングロ・アイリッシュにとってアイルランド語を翻訳することは、アイルランドという、自分たちの住む土地に根づくことを意味していたので

はないか。彼らが推進したケルト復興は、アイルランドに内なるアイルランドを覚醒させただけではなく、彼らアングロ・アイリッシュにとっては、アイルランドという、かつて先祖が入植した異邦の土地に、彼らなりの祖国を見出そうとする側面もあわせもっていると思われる。彼らはアイルランドという土地に移住し、自動的にアングロ・アイリッシュになったのではない。イングリッシュからアングロ・アイリッシュになるには翻訳が必要だった。

注

- 1) 本稿は日本英文学会第74回大会(2002年5月25日・26日、北星学園大学)、シンポジウム「女性詩人の発掘——英文学史を見直す」で発表した原稿の一部に基づいている。
- 2) J.C. Beckett, *The Study of Irish History: An Inaugural Lecture delivered before The Queen's University of Belfast on 13 March 1963*, The Queen's University of Belfast, 1963.
- 3) J.C. Beckett, 15.
- 4) Andrew Carpenter and Seamus Dean, 'Introduction' to 'The Shifting Perspective (1690-1830)', *The Field Day Anthology of Irish Writing Volume I*, Seamus Deane ed., Field Day Publications, 1991, 961.
- 5) 本稿では以下の二種類のテキストに拠った。
Miss Brooke, *Reliques of Irish Poetry: consisting of Heroic Poems, Odes, Elegies, and Songs, Translated into English Verse: With Notes explanatory and historical; and the Originals in the Irish Character. to which is subjoined An Irish Tale*, J. Christie, 1816. 以下、*Reliques*(1816)と略記する。
RELIQUES OF IRISH POETRY (1789) by Charlotte Brooke and *A MEMOIR OF MISS BROOKE*(1816) by Aaron Crossley Hobart Seymour: Facsimile Reproductions with an Introduction by Leonard R. N. Ashley, Scholars' Facsimiles and Reprints, 1970.
- 6) *Reliques*(1816), lxii.
- 7) Seamus Deane, *Strange Country: Modernity and Nationhood in Irish Writing since 1790*, OUP, 1997, 103.
- 8) Michael Cronin, *Translating Ireland: Translation, Languages, Cultures*, Cork University Press, 1996, 99.
- 9) *Reliques*(1816), 135.
- 10) *Reliques*(1816), vii-viii.
- 11) Seamus Deane, *A Short History of Irish Literature*,

University of Notre Dame Press, 1986, 64. 以下, *Short History* と略記する。

- 12) テキストは次の版に拠った。Seamus Deane ed., *The Field Day Anthology of Irish Writing* 3 vols., Field Day Publications, 1991.
- 13) A. Norman Jeffares, *Anglo-Irish Literature*, Macmillan, 1982, 92.
- 14) *Short History*, 68.
- 15) *Short History*, 63.
- 16) William Butler Yeats, 'The Poetry of Sir Samuel Ferguson', *Davis, Mangan, Ferguson?: Tradition and the Irish Writer*, W.B. Yeats and Thomas Kinsella, The Dolmen Press, 1970, 46.
- 17) *Short History*, 86.
- 18) Michael Cronin, 102.
- 19) *Reliques*(1816), 337-38.

Translating Ireland : On Charlotte Brooke's *Reliques of Irish Poetry*

Toru Sato

Ireland in the eighteenth and nineteenth centuries was engaged in recovering her cultural identity which had been deprived and lost since the age of plantation, that is, the English policy of introducing English and Scottish Protestants onto Irish land. In the cultural movement, many antiquarians and scholars of the Anglo-Irish played very important roles, which seemed paradoxical and even ironical because they contributed to the Anglicization of Ireland.

However, the people of Anglo-Irish needed their 'Ireland', and had to discover Ireland in their own ways so that they could take root in the foreign land. They took much interest in Irish matters, especially myth, legends and poetry written in the native language, and they positively translated Irish writings into English.

Charlotte Brooke, one of these Anglo-Irish, published her translation, *Reliques of Irish Poetry* in 1789. She hoped that her translation would promote a harmonious exchange between Ireland and Britain as she expressed in the preface: 'As yet, we are too little known to our noble neighbour of Britain; were we better acquainted, we should be better friends. The British muse is not yet informed that she has an elder sister in this isle; let us then introduce them to each other!'

Brooke's ambition was frustrated when Britain and Ireland were united by Act of Union in 1801 just after the patriotic rebellion of United Irishmen in 1798. Her translation, however, played another role as one of the forerunners promoting cultural nationalism in Ireland, and it encouraged the excavation of the hidden cultural materials of Ireland, which her later translators/poets exploited to nurture the Anglo-Irish literature in the nineteenth century.